

【主題】 地域・保護者と共に児童の心を豊かに育むための社会に開かれた教育課程の実際

【副題】 地域の偉人「大槻俊斎」の志を児童の生きる力に

【学校・団体名】 宮城県東松島市立赤井小学校

【役職名・氏名】 校長 片岡 明恵

## 1 はじめに

宮城県東松島市立赤井小学校は、令和5年11月に開校150周年を迎えた歴史の深い学校である。明治時代の学制発布と共に、「明治」「大正」「昭和」「平成」「令和」とその時代に合わせ、たくましく生き抜き活躍できる子供を育成しようと、コミュニティ・スクールになる以前から地域一丸となって創り上げられてきた学校である。「伝統の襷」をつないできた地域住民の「心のふるさと」とも言える学校である。

明治から現在に至るまで、地域の人々の心に襷となって継承されてきたのは、東松島市赤井で生まれ江戸時代に活躍した西洋医学の師「大槻俊斎」の志である。

昨今、少子高齢化や地域のつながりの減少による教育力の低下、発達障害や貧困といった福祉的な課題の増加などを背景に、学校が抱える課題が複雑化・多様化している。また、グローバル化、人工知能の進化などによる社会の変化が激しく、これから先は予測困難な社会になると言われている。このような社会的課題を解決するために、社会全体で子供の育ちを支える必要性和社会に開かれた教育課程の重要性が見直されている。

本校が進める地域の偉人「大槻俊斎」を柱にした学校経営及び教育活動の充実は、今後、どのような時代を迎えようとも、不易の教育活動になると確信している。

「大槻俊斎」を中心に据え、地域の自然、歴史、文化、伝統行事を教育活動に関連付け、地域及び保護者と共に、ふるさとに誇りをもつ心豊かでたくましい児童の育成に力を入れていく必要がある。

このことを実現させるために、社会に開かれた教育課程の編成と実施を充実させていきたい。地域と共に連携・協働しながら目指すべき学校教育を実現していく過程は、コミュニティ・スクールの理念を実現させ、児童、地域を明るく活性化させるものになると考える。

## 2 地域の偉人「大槻俊斎」を柱にした教育活動

### (1) 「大槻俊斎」の人物像

桃生郡赤井村星場（現東松島市赤井）で誕生し、医学の道を志し18歳で江戸に渡った。この時、俊斎の「医師となり病気に苦しむ人を助けたい」という志を

叶えるために、東京生活の金銭を含めた全面的支援をしたのは赤井地区の住民であった。東京、長崎で西洋医学を学んだ俊斎は、江戸で種痘所を設立し、天然痘で苦しむ人々を救った。種痘所は現在の東大医学部の前身、西洋医学所であり、俊斎は初代頭取として後進の指導に当たる一方、天然痘ウイルスの撲滅などに貢献している。言わば現代医学の礎を作った人物である。

### (2) 「大槻俊斎」学習プロジェクトの意義

2015年、地域住民とPTA、教職員が「大槻俊斎」学習プロジェクトを立ち上げた。俊斎の強い志、それを理解し支えた地域住民の思い、その思いに応えるべく感謝の気持ちを忘れず努力を重ねた俊斎。そして夢を叶え、地域への恩返しを込めて、多くの人命を救い医学に貢献した俊斎の生き方を、教育活動に取り入れるために立ち上げたプロジェクトである。地域の偉人「大槻俊斎」の志を教育活動に関連付けることで、児童の夢と志を育む教育活動に迫ることができている。2017年には学校、地域、保護者の連携で志教育の副読本「大槻俊斎」を完成させた。翌年には低学年児童でも理解できるように紙芝居も作成した。学校生活において、常に俊斎の志に触れられるように、すべての教室に俊斎の写真を掲示している。

さらに「俊斎学習カリキュラム」で取り組むことを具体化し、教育計画に位置付けている。

時期	取組	概要
年間を通して	校内各所に俊斎コーナーを設置	玄関・廊下・図書室等に計画等の表示を整備
児童会活動	俊斎集会	全校で大槻俊斎を理解する
俊斎月間（9月）	道徳や国語で俊斎について学ぶ	全学年で発達段階に応じた学習をする
俊斎発表会（10月）	4年に一度、劇による発表	6年生がオリジナルの台本を作成し全校に向けて劇の発表をする

表：「大槻俊斎」学習カリキュラム



写真：校舎内に掲示された大槻俊齋学習の年間計画

(3) 「大槻俊齋」学習を柱にした地域に根ざした学習  
 (「赤井5」)の展開

赤井5(地域学習)				
1大槻 俊齋学習	2田んぼ の学校	3たてわり 活動	4SDGs 活動	5和太鼓 活動

「大槻俊齋」学習を発端に、赤井地区に生まれた者としての誇りをもつことができるように、「赤井5」と名付け、5つの学習をカリキュラムに位置付けている。

1「大槻俊齋」学習を柱に派生した4つの教育活動は下記の内容である。

赤井地区には俊齋を支えた土台として、江戸時代から地域と子供のウェルビーイングが成立していた文化がある。この文化を絶やさないために2「田んぼの学校」を設定した。地域住民から学び、体験を通して地域に感謝し、地域を愛する心を育むために、5年生の社会科に関連付けている。

さらに、ウェルビーイングを創造できる人材を育成するために、業前活動や児童会活動に3「たてわり活動」を定期的に位置付けている。

地域住民から学び、異年齢で学び合う成果として得られる視野と関連付けの力を「もの」や「こと」にも発展させるため4「SDGs活動」を明確にした。

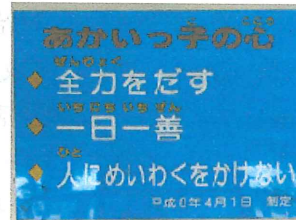
そして赤井地区の魂を体現するもの、赤井地区の文化の継承として5「和太鼓活動」に重点的に取り組む。この和太鼓活動には全学年が取り組み、1月には互いの成果を見合う和太鼓発表会を設定している。6年生だけが赤井地区保存会が継承する「赤井いぶき太鼓」を演奏することができる。6年生以下の学年は、「赤井いぶき太鼓」を演奏できるようになることを目指し、学年に応じた演奏曲を練習する。上の学年の児童が一つの学年の指導者となって、全校で和太鼓のスキルを上げられるように、児童同士の教え合い体制を取っている。この教え合い、高め合いの仕組みは「田んぼの学校」で大人から学ぶ体験、「たてわり活動」で常に異学年交流を行う体験、「SDGs活動」で持続可能な

取組に対する意識の育み、「大槻俊齋」学習で志をもち続けること意識の醸成等、赤井5の学習で身に付ける総合力と押さえている。

3 開校150周年の節目となる令和6年度の取組

(1) 始業式における校長講話(4月): 儀式的行事

赤井小学校120周年記念の年に「あかいつ子の心」



が制定されている。これは大槻俊齋の高い志を念頭に作成されたものであり、校内各所に掲示されている。

子供たちの心が、新年度の希望と意欲にあふれる1学期始業式で、「大槻俊齋」の生き方と「あかいつ子の心」について話した。俊齋学習を行う時だけではなく、日々「大槻俊齋」の志、俊齋を支えるために地域住民が心一つを支えた志、この二つの志を思い起こすことができるようにしている。

自分自身の夢をもって努力し続けること、そして他者と力を合わせて願いを叶えようとする態度は、予測困難と言われる激動の社会を生きる児童に、育成しなければならない大切な資質である。

(2) 「大槻俊齋」集会(5月): 特別活動

入学間もない一年生にも、教室掲示の「大槻俊齋」を理解することができるように、児童会主催で「大槻俊齋」集会を開いた。大槻俊齋の生き方を高学年がプレゼンテーションを行いながら伝えた後に、クイズを行い、全校児童で楽しみながら理解を深めることができた。内容、方法、伝達者を変えながら、繰り返し大槻俊齋の生き方を発信していくことに意義がある。このことを全教職員で確認し教育活動に関連付けている。

(3) 修学旅行で学ぶ「野口英世」と「大槻俊齋」の  
 関連付け(5月): 集団宿泊的行事



写真：野口英世と俊齋の関連付け

6年生は福島県会津若松市に修学旅行に行く。会津若松市では、10歳から藩校「日新館」で学ぶ子供の志、ふるさと会津を愛した白虎の姿、そ

して医学を志し多くの人命を救った野口英世を中心に学ぶ。野口英世の生き方は「大槻俊齋」と重なるところが多い。

そこで、子供たちにより強く「夢」と「志」をもつ



意義と「大槻俊斎」の生き方に深い関心をもてるようにするために、野口英世と大槻俊斎を関連付けた事前学習を行った。また、会津若松市にある野口英世記念館から職員の方に来ていただき、野口英世の人生について詳しく学ぶ機会を設定した。関連付けることにより、児童はあらためて大槻俊斎の尊い生き方に共感していた。

#### (4) 赤井の「田んぼの学校」(5月) : 社会科

赤井地区は田園が広がる農業中心の地域である。赤井地区で生活する上で、稲作への関心と先人の苦労や工夫を学習することは不可欠である。そこで「田んぼの学校」は、体験を通じた貴重な学びの場になる。

昔ながらの苗植え体験をするために、保護者と地域の方が20名程度サポートをしてくれた。サポーターの皆さんは失敗を含めて学習だと話し、活動を説明した後は見守りに徹してくれた。この大人の「待つ」「見守る」姿は、児童の主體的な体験を後押しするものになった。こうして教えられる体験、任せてもらえる体験が日頃の児童会活動、委員会活動、たてわり活動の教え合いに影響するモデルになると押さえている。



児童の体験後の感想から地域の方々に対する感謝と尊敬の念を多く読み取ることができた。

#### <児童の感想>

今の時代は機械があって便利ですが、昔は大変だったことが実感できました。私はこの学習での体験を忘れずに農家の方々に感謝して過ごしていきます。(A・Y)

#### (5) たてわり活動 (通年活動) : 児童会活動

児童に夢や志をもたせるために必要なことは、自尊心と自己有用感の醸成だと捉え、たてわり活動を大切にしている。活動を軌道に乗せるまでに手間は掛かるが、1年生から6年生までを班に編制し、一緒に読書活動を行ったり、スポーツテストを行ったり、業前遊び活動を行ったりしている。

多くの児童が「和太鼓活動」で先輩から教えてもらったり「田んぼの学校」で大人に見守ってもらう体験をしたりしていることから、自分も相手も認め合いながら活動することが上手である。本校に不登校児童がないのは、「和太鼓活動」「田んぼの学校」「たてわり活動」による人との交流と教え合いの成果と言える。



写真: 下級生へ読み聞かせ

写真: 下級生と遊び活動

#### (5) SDGs活動 (通年) : 総合的な学習

本校では異年齢のつながりが、児童の主体性や気付きを促す基になると押さえている。このことから学校の課題解決は教職員の取組と並行して、児童からの発信による働き掛けを多くしている。

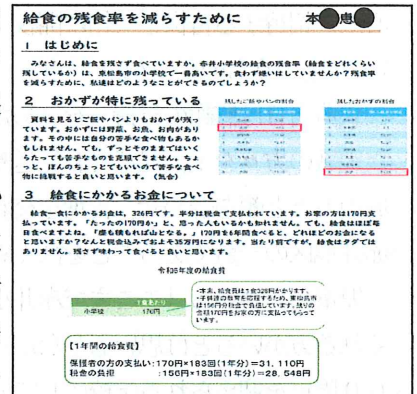


写真: 児童からのSDGs発信

右は6年生が給食の残食率を減らすためにデータ分析を行い、全校への呼び掛けを校内掲示と校内放送で行ったものである。この発信は6年生全員が行った。

このように「人」「もの」「こと」を関連付け、自分たちの学校を自分たちで作る意識を高めることは、地域づくりを主體的に行う人材育成の土台になると考える。

#### (6) 和太鼓活動: 音楽・文化的行事

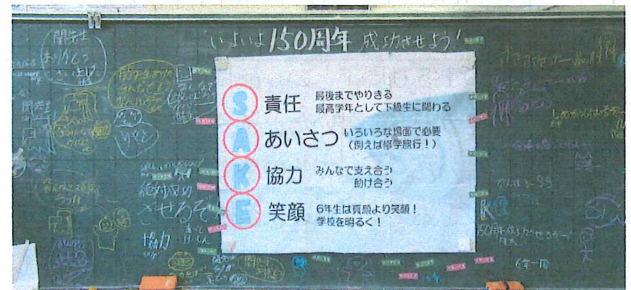
年に一度の和太鼓発表会は他の学年の児童や保護者、地域の方に演奏を披露する機会である。



この和太鼓発表会

は上の学年に対する憧れを、さらに強く抱かせる機会になっている。こうして6年間、和太鼓演奏に取り組むことで、赤井地区の伝統文化が児童に浸透していき、「和太鼓=故郷を思う気持ち」が醸成されていることを実感している。

#### (7) 開校150周年記念式典: 特別活動





令和6年6月に開校150周年記念式典を行った。式典を、児童の生涯の思い出にするために、児童にどのような取組をしたいか話し合わせながら準備を進めた。「学校が150年も続くなんで、赤井の人たちはすごい。」などと言いながら準備が進んでいった。150周年を祝う横看板を全学年で作成したり、みんなで心を込めて歌の練習をしたりした。4月から子供たちの心は「招待する皆様と一緒に開校150周年を喜びたい。」というものだった。

式典当日は感謝の気持ちを込めた発表と、来場された地域の方々と全校児童でお見送りをした。児童は地域の方々と顔を合わせ、言葉を交わすことで、さらに赤井地区の一員であることを深く感じ取っていた。

児童の作文から「ここまで赤井小学校をお祝いしてくれる方がいるとは思いませんでした。」「これから200周年を迎えられる学校にしていきたい。そのためにも協力し合う学校にしたい。」というように将来を支える人になろうとする気持ちを強くしたことが分かった。



写真：式典での発表



写真：地域の方のお見送り

<児童の感想>

私たちの学校は150周年を迎えた。式典の日、講堂は人で埋め尽くされるくらい大勢の人がいた。私は（こんなに地域の人に愛されているのだ）と思った。～略～私はこれからも赤井小学校を自慢の学校にしていきたいです。そのために、助け合い、協力し合うあかいっ子になりたいです。（4年 O・R）

<児童の感想>

式典では1～6年生のみんなが一人一人一生懸命に発表しました。ぼくは（みんな頑張ったな）と思いました。声をはきはきしていたり笑顔で言葉を話していたりしました。これからぼくは6年生までに、あかいっ子として赤井小学校で活躍できる先輩になりたいです。今はまだ4年生で頼る側ですが、人に頼ってもらう人になって、ぼくは大人になってもこの赤井小学校を見守っていきたくて思っています。（4年 M・A）

さらにこの150周年という節目を機に、一人一人が将来の夢をカードに書いた。イラストなどを交えながら詳しく書いた。そしてその夢に対して保護者に応援メッセージを添えてもらい、全校児童分を廊下に掲示した。全校児童の夢カードが掲示されると、児童も

保護者も教職員も楽しみながら眺めることができた。親子の微笑ましいやり取りや、子供らしい夢や創造性豊かな夢、意志の強さが表れた夢など、一人一人の個性を新たに感じる機会にもなった。児童には励まし合う様子や互いの夢を称え合う様子があり、夢に向かって頑張ろうと意欲を新たにすることが見受けられた。



<児童の感想>

これから私はあかいっ子として、外に行って元気に走ったり、友達といっしょに遊んだりしたいです。夢カードの夢をかなえられるように努力をしていきます。（4年 C・M）

4 今後について

以上の取組から分かるように、本校は、子供の豊かな成長を心から願う保護者や地域に支えられた恵まれた学校である。教職員のマンパワーだけでは赤井5を教育課程に位置付け、存分な体験活動を保障することは不可能だった。小学校時代に、五感を働かせ体験に心躍らせながら学ぶ機会を設定できることは幸せなことである。そして少子化の時代ではあるが、地域に根差した教育活動を通して、様々な年代の方が学校を中心に集い、情報交換ができることは安心・安全な町づくりにつながり、児童の生活が守られる安心感も大きい。また、開校150周年記念式典を今年度の途中ゴールに設定し、赤井5での体験や学習を意図的にたてわり活動に落とし込み、大槻俊斎を関連付けながら向上心を持たせることができたことは大きな成果である。

このように地域の絆に守られ、豊かな体験活動によって様々な人と心の交流を重ねた児童は、ふるさとを愛しふるさとの未来を創る人間に成長していくだろう。

学校では、これからも「大槻俊斎」を柱として、到達させたいゴールを明確にしながら赤井5や教育課程をブラッシュアップさせ、地域資源や学習を有機的につなぎながら自慢のあかいっ子を育てていく。そして今後もコミュニティ・スクールとして輝き放つ学校運営に努力していきたい。